心理の分析と自由（一）

松尾正路

一

人間が自由を求める意識的な存在として生きてゆくかぎり、自己を支へ、推進するための判斷や方法がおこなはれる。それは知的活動であると同時に意志行爲であり、また、心理的な動きとして考へられるものである。しかし、判斷は心理に優先するものか、また、意志とは、固定した心理の緊張狀態にすぎないものか、そして、心理は、意識の背後に在つて意識をも支配する獨立した生活者であり、したがつて、われわれが普通考へる心理的な論理といふものは實は存在しないのではないか、といふやうな問題は、分類や定義の便宜に賴る以外には、明かにすることのできない性質を持つてゐる。文学のなかでは、これらの諸條件の複雜した有機的な繫りや影響を一般的に心理と呼んでゐるやうである。それは、分析實驗の對象として方法的に處理される心理学上の心理と異つてゐるばかりでなく、自己を維持し進める自由の機能としてはたらき、現實の知覺や認識の仕方に關係し、哲学の世界にまで觸れるものである。

十九世紀の科学信仰が、幾つかの試み、態度、段階をたどりながら、科学の方法を文学に採用しようとした結果、

心理小説の概念には、いつの間にか、特に心理を方法的に究明表現する作品だけが心理小説であるといふ考へ方が入つてゐる。しかし、この場合にも、たとへば、心理に關する作者の生理学的な見解がそのまゝ作品の意味となり、作品の價値を決定してゐるわけではない。

スタンダールは「戀愛論」の第三の序文（一八四二）に、「この戀愛生理学の風變りな形式について讀者の寛恕を乞ふ」と書いてゐるが、彼の「戀愛論」はすこしも生理学ではない。むしろ、最初の序文（一八二六）「この書物は、全體としては戀愛の情熱と呼ばれるものの中に、次ぎ次ぎに續いて起る様々な感情を簡單に、正しく、いはば數学的に説明したものである。」といふ言葉が適切であるやうに思はれる。「數学的」ではないにしても、「著者は、戀愛と稱する魂の病氣の様々な經過を冷靜に記述してゐる。」この戀愛精神学とも呼ばるべき書物は、スタンダール個人の經驗と反省による分析と分類であつて、戀愛の生理学的要素は完全に排除されてゐる。

なほ、バルザックの初期に屬するもので、「結婚の生理学」といふ題名の作品がある。スタンダールの場合と異り、多分に生理学の匂ひを發散させてゐるが、俗衆の好奇心にうつたへる程度の卑俗な分類觀察を展げた雜文にすぎない。文学でもなく、文学的な心理学でもなく、まして、生理学ではない。「人間喜劇」の殿堂を築いたバルザックの情熱の分類は、このやうな「生理学」ではなく、情熱の質と美の力である。注意すべきことは、スタンダールの「冷靜な」心理分析が自己の自由を保持するための求心的な方法論となつてゐるのに反し、バルザックの場合は、それが、人間觀察の旺盛な好奇心のなかに同棲し、遠心的なはたらきをしてゐることである。「人間喜劇」に現れる多様な人物の多様な情熱の世界は、バルザック個人の内的な自由の要求にもとづく自己の矛盾や變貌の現れとして、われわれの目をバルザック個人の内部に向けさせるやうな性質、關係を持つてはゐない。むしろ、様々な情熱が持つそれぞれの意味として受取るべきものである。興味の中心は、主題と、主題に對するバルザックの野心である。バルザ

ツク文学の過剰不均衡は美学的な感覺能力の缺如としてよりも、彼の作品が自由の不完全な産物であつたと考へるのが至當であらう。なぜかといへば、安定と均衡と自律を求める自由は、まづ、對象と自己との正確な關係を手に入れようとする、いはば、精神の合理的な節約行爲である。しかるに、バルザックの分類や分析は、ロマン主義の自由、即ち、過剰の自由を調へることさへもできなかつた。ロマン主義の熱情に埋沒した自由は、スタンダールやバルザックの場合のやうに、分析的な知性によつて、その半身を救はれようとしたのであるが、その後再び同じ運命を繰り返すことになるのである。ブールジェの「弟子」は、自然法則の實證的な認識と、その方法以外には何ものも信ずることのできない、いはば科学信仰のニヒリズムを批判した作品である。

この小説の主人公「弟子」の師アドリアン・シクストは、「意志の解剖学」「情熱の解説」の著者として現れる心理学者である。さらに生理学者クロード・ベルナールや實驗心理学の先驅者リボオの著述がこの「弟子」の指導原理となつてゐる。弟子は師の教へを忠實に實行するために戀人と自己とを心理の實驗對象として扱ひながら、悲慘な敗北を喫するといふのが、この小説のテーマである。しかし問題は、青年の選んだ眞理が誤つてゐたといふことよりも、彼が何故このやうな眞理を選んだか、といふ點にある。一人の青年が眞理に服從したといふのではなく、一つの性格が選び取る眞理としての問題である。

小説「弟子」は、十九世紀後半の唯物論に毒された青年層をモデルとして描いたものであるが、人間の精神に科学の法則を適用しようとした「弟子」の實踐は、すでにそのまゝエミール・ゾラの文学理論となつてゐたものである。

「私がこの小説のなかで試みた研究は、人物の性格ではなく、氣質である。二人の主人公の愛は、ある慾望の充足であり、彼らが犯した殺人罪は不義の結果である。彼らの良心の苛責なるものは、生理的混亂の別名にすぎない。この小説は、まづ何よりも科学的な目的をもつて書かれてゐる。注意深い讀者は、この作品の各章が生理学上の興味に

價する研究であることに氣づかれるであらう。」

これは、自然主義文学理論の下に最初に書かれた「テレーズ・ラカン」の序文であるが、文学における性格の否定は、まづこのやうに、人間を生理的なメカニスムとして受取る自然主義文学から發してゐる。そして、この考へは、「ルーゴン・マッカール」叢書の理論體系として書かれた「實驗小說論」（一八八〇）のなかで一層明瞭大膽に語られてゐる。

「私の理論的防塞は、あらゆる點において、クロード・ベルナールの背後に築かれてゐる。私の思想を一層明つきりさせるためには、また、私の思想に科学的な嚴正さと眞實性を與へるためには、殆どの場合、「醫者」といふ言葉を「小說家」といふ言葉に置き代へるだけで足りるだらう。」

「クロード・ベルナールは、醫術を科学の領域に導くために一生涯を研究とその鬪ひに費した。彼は、化学や物理学において無機物に適用される方法が、生理学と醫学において生物に適用さるべきことを證明した。そして私自身は、この實驗方法によつて人間の肉體の生活を識ることができるとすれば、おなじ方法によつて情熱や精神の生活を識ることができることを證明したいと思ふ。」

そこでゾラは、文学の實驗について次のやうに說明する。

「實驗者とは、自然現象を、ある目的をもつて變化修正し、自然が提供しなかつた條件や環境の下に研究する人々である」が、文学の場合、「作家は、觀察者であり、同時に實驗者である。觀察者としての作家は、彼が觀察したまゝの事實を提供し、やがて人物や人物の環境が發展してゆくための固い地盤をつくる。次に實驗者としての作家が現れ、實驗がおこなはれる。即ち、幾人かの人物をある特定の物語のなかに活躍させるのであるが、この場合、事實の發生繼續は、すでに研究された現象の必然法則に從つておこなはれなければならない。」

「弟子」の青年が戀人シャルロットを實驗するために「クレーヴの奥方」や「ウージェニ・グランデ」を讀ませるのは、ゾラの「實驗小說論」を最も忠實に實行してゐるにすぎない。ブールジェは何故、「弟子」のモデルを先輩エミール・ゾラにとらなかつたのか？ゾラこそ自ら宣言するやうに、クロードベルナールやデュカや、また、文学を人間生活の調書と考へたテーヌの「弟子」ではなかつたか？しかるに、「弟子」たるべきゾラは、彼の實驗論を、ブールジェがモデルとした「弟子」の場合とは全く異つた方向にすゝめてゐる。ブールジェによれば、一八八〇年代の青年は二つのタイプに別れてゐる。その一つは、精神の不信と理想の否定を立身出世の方法論に集結するジュリアン・ソレル型の怪物であり、他の一つは、さらに文明化された、それだけに一層おそるべき、洗練されたエゴイスト、もしくはニヒリストである。このタイプにとつては、人間の魂は、精巧なメカニスムにすぎないもので、實驗對象の興味や好奇心の對象として存在する。「彼の批評精神は餘りに早く目覺め」、「二十五歳にして、すでにあらゆる思想をかけ廻り、」世界に殘されたものは、自己の精神を最も有效に使用する方法論だけである。そこから、自己崇拜の形となつて現れるエピキュリアンが、モーリス・バレスの「自由人」に他ならない。ところが、ゾラの自然主義は、大きく廻轉して、社会主義的な理想へ向ふ。

「人間の肉體的事實や現象は、單獨に無關係に現れるものではない。なぜならば、人間は孤獨な存在ではなく、社会もしくは社会環境のなかに生きてゐる。そして、この社会環境は絶えず現象を支配する故、われわれ作家にとつて最も重要な研究は、個人を支配する社会、ならびに、社会に對する個人の研究である。」

「われわれが、將來、人間を支配する諸々の法則を完全に把握するならば、そしてもし、人々が理想的な社会に到達しようとするならば、われわれはこれらの諸法則をもつて、個人とその環境にはたらきかけさへすればよい。われわれは、かくして、一つの、いはば、應用社会学を爲す者であり、われわれの仕事は、政治学、經濟学の補助となる

ものである。」「善惡の指導權を持ち、生活と社会を整頓し、終極においては、社会主義の一切の問題を解決し、また、犯罪に關する諸問題を解決することによつて、正義の强固な基礎づけをおこなふなど、われわれこそ人類の最も有益な、最も道德的な働手ではないのか？」

「自然主義作家は、實驗主義のモラリストである」

ゾラは、かうして、生理学や醫学が人間と社会に貢献する同一の理由を文学に求め、自らフランス傳統のモラリストの列にあることを宣言する。科学と文学の間に共通の使命を考へることは、たしかに重要な課題である。ゾラは、今日一層高く評價さるべき役割を果したと思はれるのであるが、使命は、つねに、全體に向つて話しかけられる言葉で、それが個々の自由の意識にとらへられたとき、はじめて意味を持つ。ある個人の遺傳が遺傳の法則に從ふやうに、ある個人の心理が心理の法則に從つてゐる事實は、外側から內側を見るのではなく、たゞ外側からのみ見られた法則的な事實である。しかるに、文学の外側は內側の表現でなければならない。作者は、內側を一層よく描くために、外側を選ぶにすぎない。內側の心理分析は、手袋を裏返しするやうに、その知的な分析行爲によつて、內側を外側に返すことになるので、むしろ、內側のために外側の沈默を選ぶのである。象徵主義は、知的な手段をかりながら、對象への知的行爲を放棄した謙讓と懷疑の文学にほかならない。したがつて、ゾラの文学が文学となるのは、作者の實驗方法、即ち、現實の修正や組合せによるのではなく、作中の人物が自ら感じ、自ら考へ、自ら行爲してゐるものとして描かれ、讀者もまたそのやうに受取る自由による。ゾラが上手に書いたか書かなかつたといふ最も重要な問題がそこで決められる。

モーパッサンは、自然主義のかういふ法則的な決定論（デテルミニスム）と心理分析に懷疑を表明した最初の一人である。

「たとへわれわれが人間を觀察した結果として、その人間の性質を、殆どあらゆる場合の樣態まで豫見するほど正

確に決定することができるにしても、またもしわれわれが、ある氣質を持つたある人物が、ある場合、必然的にある行爲をするであらう、と、正確に言ひ得るとしても、われわれ自身ではない人物の秘められた思想のすべての發展を、また、われわれ自身の場合とは異つた本能の神祕な要求のすべてを、そして、われわれ自身とは異つた肉體の諸器官、神經、血液などを持つた人物の混濁した慾望のすべてについて、われわれがその一つ一つを決定することができないことに注意しなければならない。」

モーパッサンの懷疑は、自然法則の否定ではなく、人間の內部に關するかぎり、そして、肉體の個人差によつて外界から受取る印象が異るかぎり、そのやうな必然法則を知ることはできないといふ文学上の不可知論である。いかなる小說が最も小說であるかといふ原則論を否定した理由もこゝに在る。この見解は、作家が他人の內部に移入することができないといふ点で心理分析を拒けてゐると同時に、ゾラの樂觀的な科学主義をも排してゐるのであつて、このやうな懷疑は、當然、內側よりも外側を選び、その外側への忠實さによつて內側に對する謙讓さを現すことになる。

「人體の骨組がわれわれの目に見えないやうに、心理を露呈せずに作品のなかに隱す」作家たちは、「現實において、心理が生活の事實の裡に隱れてゐる」やうに、すくなくとも、作品と現實に對する「誠實」さの点で優れてゐる。モーパッサンが象徵主義の文学運動を認めようとしたのは、このやうな藝術上の懷疑主義からであつた。

しかるに、生活者としてのモーパッサン自身の精神は、文学の「誠實」さが作品を生んだやうには、結實しなかつた。「水の上」をはじめ、幾つかの紀行文は、觀る自然主義者の目と、感ずる詩人の心との悲劇的な不調、破綻を物語つてゐる。文学の理解においてゾラよりも聰明であつたモーパッサンも、人間の凡庸と愚劣を救はれ難い自然の法則的な事實と觀ずる点では、かへつてゾラよりも一層自然主義者であつたが、自由の抵抗が訴へる悲鳴を完全に絞殺すことはできなかつたのである。ヨツト「ベラミ」號は、その主人の精神のなかで自由を失ひ、沈沒してしまつた。

二

現實は、自由の永遠の闘ひの場である、といふ考へ方からすれば、作家は、作品のなかではじめて自由となる。創作は、さういふ自由の行爲であつて、いはば、現實に對する自由の復讐行爲である。しかしそれは、作家の自由が現實において滿たされなかつた部分を充足するといふ經濟的な意味ではなく、作家の精神と現實の接觸から生れる自由の無限の變身として現れるものである。そこでは、風景や、ある瞬間の幸福や悲しみ、動作など、現實の再表現と考へられるものまでが、そのまゝ現實への復讐行爲となる。創造に參加しない現實それ自體は、創造の前では、單なる存在としての虚無にすぎないからである。

しかし、自由の變身としての復讐は、現實に對する自由の要求と、それへの抵抗が著しいほど、作家の精神告白として、明瞭な形をとる。たとへば、最も冷靜な作風(スタイル)が、最も激しい作家の内面を語り、皮肉や絶望の書物が、最も信ずることを欲する纖細な作家の心の變身であつたりする場合である。われわれが心理と呼ぶものは、このやうな自由を可能ならしめる精神の發展と推移の祕密に他ならない。そして、その無限の度合や差異を決定する精神と肉體の源泉を性格と呼ぶことができるのではないかと思ふ。それ故、感動のなかに心理を埋沒したと思はれるロマン主義の文学も、時には、最も心理的な、最も性格的な文学となつてゐる。心理の分析行爲が感動の醉を醒すほど有効にはたらいてゐないといふことは、心理の否定にはならない。分析行爲そのものは、一つの方法にすぎない。狂人の精神分析は精神病理学に屬する問題であつて、文学ではない。心理は、むしろ、ある特定の精神のなかで、どのやうな分析行爲がおこなはれるかといふ自由行爲のなかにある。したがつて、ロマンティストがレアリストであらと努めるとき、また、レアリストの自覺のなかにロマンティストの氣質が發言權を持つてゐるやうな場合に、心理生活の最も活潑

な狀況が見られる。そして、かういふ場合に最も適した性格を、心理学では、ティミド（timide）と呼んでゐる。即ち、自己の精神的均衡を失ふ場合の豫感、不安、恐怖、動揺、羞恥などであり、また、これらの動揺から自由を取戻さうとする様々な試みであつて、その反逆と復讐は、逃避、無私、耽溺、激情、行動、シニスム、冷靜、など、限りない變身となつて現れるものである。ラ・ロシュフコオが自愛（amour-propre）の變貌について語つてゐるあの名文を想起すれば足りるであらう。心理学者ポール・アルタンベールは、ティミドの定義のなかで次のやうに述べてゐる。

「ティミドの恐怖の對象は、本質的に內部的なものであり、純粹に主觀的な原因によるものである。……それは、生命に關する危險の恐怖ではなく、ひたすら自尊心の危害にかゝはるものである。自分が見損はれてゐるか、劣等または滑稽に見られてゐるといふ屈辱感である。」（Les timides et La timidite', paul Hartenberg）

自己に關する他人の評價をおそれるのは、羞恥の感情にもつながり、慣用語としてのティミドの意味では、この定義は正しいであらう。しかしティミドの性格には、一層根源的な素因が內在してゐるやうに思はれる。自己と他人との分離感情は、自己評價の意識として現れる前に、自己の完全表現、ならびに、自己と外界との完全一致が困難であるか、または不可能であるといふ敏感な、時には絕望的な意識にもとづいてゐる。そして、この意識の前提條件となるものは、自己表現の技術的な巧拙ではなく、感動や精神狀態の絕對感である。いはば、「完全」または「絕對」の病ともいふべきものである。そしてこの絕對感は、外界と自己との交通を切斷するばかりでなく、意識構成としての思想の誕生や發展の妨害となる。ロマンティスト、ルウソオの心理分析がわれわれの注意をひくのは、この点である。彼の「懺悔錄」が多くの資材を提供してゐる。

「私は敏感な激しい熱情と、誕生の遲い、困難な、その時が過ぎ去つてからでなければ現れないやうな思想を持つてゐる。感情は電光よりも速く私の魂を充すが、私を明るく照すかはりに、私を眩惑し、燃燒する。私はすべてを感

ずるが、何も觀ない。……考へるために、私は冷靜でなければならない。しかし、不思議なことは、待つことさへ許されるならば、私もまた確實な方法や洞察力や精緻な判斷力さへ持つてゐることである。」

外部的にも內部的にも、あらゆる意味の强制が除かれてゐる時だけ、この性格は完全である。外界の印象は、內部の完全な自由に消化されるまでは、一種の强制者として對立する。

「思想は、それを受取る時にも、私にとつては苦勞である。私は人間を研究した、そして、相當な觀察者だと信じてゐる。しかし、自分が現在觀てゐるものについては何も觀ることができない。私がよく觀るのは、想ひ起す事柄だけである。私の精神は記憶の世界でのみ敏活にはたらく。私の目の前で語られるどんな言葉も、どんな事柄も、私には觸れてこない。私はそのなかへ入つてゆかない。私に觸れるものは、それらの記號(サイン)だけである。しかし、それらのすべてのことが、再び、後から、私の裡に再現する。私は、時間も場所も調子も目つきも身振りも環境も想ひ出す。私はすべてを摑える。その時はじめて、人が行ひ語つたことの意味を發見する。この場合、私の判斷が誤ることは殆どない。」

路傍の一つの花を數十年後に語るルウソオの驚くべき記憶力は、プルーストの場合と同樣、意志や努力の加らない記憶自身の命の覺醒にほかならない。したがつて、未だそれ自身の命を持たない思想は、命の皷動をはじめるまでルウソオの內部で加熱されなければならない。

「感ずることの速さに比して、この思索の緩慢さは、私が獨り、仕事をしてゐるときにも同樣である。思想は私の頭のなかで、信じ難い困難さをもつて形成される。そこで鈍く廻轉してゐる。それから、私を感動させ、熱し、鼓動させる程度にまで醱酵する。しかも、この感動の最中に、私は未だ何も明きり見ることができない。一つの言葉さへ書くことができない。待たなければならない。やがて、知らぬ間に、この大きな動搖が鎭まり、霧が晴れ、個々の事

物がその位置を持ちはじめる。しかしそれは、混亂した長い動揺の後で、徐々におこなはれる。」

ルウソオは、こゝで明晳な分析家となつてゐる。しかし、彼は、この分析によつて過度な感動性を冷却し、外界との分離を縮めることができたらうか？　ルウソオの晩年の暗澹たる孤獨の心境は、正にその反對を物語つてゐる。彼は分析によつて、やつと自己の自由を支へたのであるが、やがて自己の分析にさへ醉はずにはをられないロマンティストの氣質を脱することはできなかつた。人間と社会に絶望した果にも、必ずルウソオがそこに居る。ルウソオがルウソオにつきまとふのである。しかし、つひに、彼自身からも離脱した無對象の世界に入らうとする。「孤獨な散歩者の夢想」に書かれた自己分析の方法は、「おそらく、その爲には秩序と方法が必要であらう。しかし、私には不可能な仕事だ。のみならず、それは私の目的に反する。私の目的は、心情の變化と繼續の狀態を理解するにある。たとへば、物理学者が日々の氣溫の變化を測定するやうな仕事を私自身に試みるのだ。」

この方法は自己を分析の對象としながら、しかも自己から脱しようとする手段であつて、感動することさへ止めようとする精神の最後の切札である。

「私にとつて　この地上のものはすべて終つた　人々は、私を歡ばせることも、悲しませることもできない。この世に希望すべきことも、恐るべきことも、もはや、何ものも私に殘されてはゐない。そして今、こゝに、深淵の底に、不幸な一人として、しかし、神のごとく冷やかに、私は立つてゐる。」

これは、ヴイニイの詩にも比すべき魂の狀態（エタ・ダーム）であつて、分析ではない。かうして、精神の調子はつねに分析を裏切るロマンティストの性格となつて現れるのである。そして、この調子が、さらに知的な性質をおびながら、哲学的な知覺としてはたらくのが、アミエルの場合である。

アミエルの日記（一卷）は、彼の精神と外界との分離について、次のやうに語つてゐる。

「私の不活動は、その心底において、限りない自己愛（amour-propre）、完全への潔癖性、人間的條件の拒否、世界秩序への無言の抗議などではないだらうか？　それは、一切か無、嫌悪から生ずる氣紛れな、無制限な野心、理想への郷愁、自己よりも卑しく見えるものを拒まうとする反撥的な氣位や傷つけられた自尊心である。心に夢想し描く無限との對比によつて、自己をも、現實をも、眞面目に受取らうととしないアイロニイである。また、そこに聖なる秩序も必然性も見出し得ないといふ理由によつて、たゞ見せかけに、環境に順應するが、本心ではすこしもそれを認めてゐない、といふやうな心の制限である。そしてまた、おそらく、現實に對しては少しも不滿をもらさないまでも、自ら滿足であるとは信じきれぬ不信の無慾である。征服を望まぬかはりに、征服されることをも望まぬ弱さである。希望まで辭退しようとする裏切られた魂の孤獨である。」

分析は、ルウソオの場合よりも遙かに冷く鋭く、性格の深處に立入つてゐる。ロマンティクな自己陶醉は跡形もなくなつてゐる。かくして、彼の精神は、「孤獨な散歩者」の場合と酷似しながら、さらに非個人的な世界へ入つてゆく。ルウソオの孤獨は、明かに彼を傷めつけた敵者を想はせるが、アミエルにとつて、外界は、殆ど異質の、越え難い普遍的な秩序として存在する。彼は孤獨でさへもない。むしろ、この孤獨から脱離した意識の、靜かな、薄明りのやうな觸覺がアミエルの知覺となつて動いてゐるにすぎない。アミエルといふ精神の色彩と調子は殘つてゐるが、路傍の一つの石のやうに無名の存在となつてゐる。時間と空間のなかに、あたかも存在しないかのごとく存在し、投げ出され、歴史や外界の通路から外れてゐる。彼の意識は、意識それ自體の永遠の本質や機能としてはたらいてゐるが、すべて特定の形を持つ個物的な意味を拒けてゐる。現世と永遠とを和解し調和する宗教のシステムさへ一つの構成的な力となつて彼を壓迫する。アミエルの精神は、分析と解體の天才に惠れながら、同時に、構成の無能力者として異常な天分を示してゐる。彼が「日記」の作者としてのみ、最も優れてゐる理由がこゝにある。構成とは、アミエ

ルにとつては、生活することである。即ち、選擇と決斷のための勇氣と無關心とエゴイスムに從つて生きてゆくことである。そして彼は、生活の不能者である。構成の困難を、ルウソオとおなじやうに、しかし、遙に心理的な深さと洞察力をもつて、次のやうに述べてゐる。（第二卷）

「適確な言葉を求める心勞や、文章につきまとふ限りない可能性のために、一つ一つの言葉が私には苦痛である。一行毎に私のペンは躓く。構成は一つの苦行である。」

「私は設計も細目も持たない。上げ潮の力も、はづみも持たない。効果のない長い努力が固定觀念のやうに張り詰めるだけである。」

「構成は一つの集中であり、決定であり、もはや私には持つことのできない流動性を必要とする。私は、諸々の私の思想や材料を一緒に溶かし合せることができない。しかるに、一つの形を與へるためには、強力な支配が必要である。主題を手荒く摑み、過つことを怖れてはならない。主題を主題に變質しなければならない。私にはかういふ一種の不敵な信頼感が缺けてゐる。」

「しかるに、私の裡には、全く相反した二つの精神の習性が養はれてゐる。素材を涸死させる科学的な分析と、動的な印象を即時に記錄することである。そして、構成の技術はこの兩者の中間にある。即ち、事物の有機的な結合と、思想の受胎作用である。」

アミエルは、さらに翌日の日記に、構成の問題を繰返し、「おまへは理解することにのみ努め、所有のために努めなかつた、」と書いてゐるが、こゝでは、構成の困難が、分析と非分析、科学と詩の對立としてではなく、臆病な戀人が豫想される所有の餘りに完全な幸福感のために、自ら所有をとり逃すティミドな性格として、即ち、主題を手荒く摑むエゴイスムと不敵な信頼感の缺如として、最初の問題にかへつてゐる。アミエルはこれを、「對象に對する過

度なる尊敬」と言つてゐる。しかし、この言葉は、自己を卑下する謙讓の美德とは、何のつながりもない。謙讓は、對象と比較される正當な自己評價によつて、對象と自己とに服從するが、アミエルの「尊敬」は、對象と自己に對し、同時に怖れと不信、分析と非分析を示す後退離脱にすぎない。相反した二つの精神の歴史ではなく、そのやうな心理小說が起る以前の性格的な知覺、恐怖である。構成の理想的な破壞要因となるものである。

「構成は、おまへの精神衛生、知的鍛錬である。有益な罪滅の行である。何故なら、それは、おまへ自身への勝利、そしておまへの怠慢と臆病と不決斷とに對する命令だからである。」

この生活不能者は、かくして、對象にも、自己にも、そして、對象と自己との間にも、宿るべき場所を持たず、永遠の放浪者となつて彷徨ふのである。

三

アミエルは、つひに、生活者としての復讐行爲に向はなかつたが、近代心理小說の布石とも考へられる「アドルフ」の作者バンジやマン・コンスタンの場合には、ティミドの典型的な變身現象がみられる。「アドルフ」もまた、自己分析の絶望的な冷酷と不信を物語る一人の生活不能者である。十九世紀初頭に現れたこの小さな一片の心理小說は、その後この世紀を通ずるブールジョア作家達の殆どすべての場合に共通した運命を豫言してゐる。しかし、「アドルフ」の作者は、けつして、「アドルフ」自身のやうに、不能と不決斷に終つてはゐない。作者は作者の自己に對し、樣々な復讐行爲を試みてゐる。

リュドレルの「バンジヤマン・コンスタンの青年時代」(La Jeunesse de Benjamin Corstant, G. Rudler) によれば、

「われわれの資料（彼の書簡をも含めて）が最も確實に證明する、そして、つねに忘れてはならないバンジャマン・コンスタンの支配的な特徴は、彼の力と、やがてその力に伴ひ現れる神經の變調である。……彼は、躍進、飛躍、運動、また、思想や感情においても、あらゆる種類の仕事に注がれる熱情、激しさ、活動力、そして、嘲笑と强暴とを持ち合せてゐる。何事も平穩に遂行されるといふためしがない。すべてがサラバンド的な調子をおびる。」

一見、アミエルとは對照的にみえるこの激しさは、ロマンティストに共通する昂奮であつて、外界と自己に對する盲目的な挑戰行爲にすぎない。陶醉が醒めるまで、その陶醉に支へられてゐるものである。分裂の病的徴候である。

「アドルフ」は、この分裂の原理を次のやうに語つてゐる。

「私のティミドな氣質は、彼女の側から離れると同時に私からも離れた。その時私は巧妙な計畫や深い工夫をこらすことができた。しかるに、一度彼女の前に出ると、私は動搖し亂れる。彼女の居ない時、私の心のなかに住ふ冷かな、殆ど非人情な誘惑者を、誰が見拔いたであらう？　彼女と一緒に居る時の私を見た人はすべて私を初心の、內氣で熱情的な戀人と考へたであらう。しかし、この二つの判斷は、いづれも誤つてゐる。人間の裡には、完全な統一といふものは存在し得ない。何人も完全に誠實ではないやうに、完全に惡意の人たることもできないのだ。」

しかし、注意すべきことは、一方が抗し難い自然であり、他方は、この自然に抗する反省と意識の活動である。そして、自由は、このいづれの側にも存在しないのである。戀人エレノールの側から離れて居る時だけ、巧妙な計畫や深い工夫をこらすことのできたアドルフが、そのまゝ戀人の側においても同じ冷靜と工夫とをめぐらし、遂行することができたとすれば、即ちそれがそのまゝスタンダールのジュリアン・ソレルである。ソレルは、スタンダールの自由人に他ならない。たゞし、つねに、野心と冷靜と工夫と決意によつて、自然と闘ひつづけてゐる自由人である。そしてまたスタンダールは、同時に、自由の敵者たる自然を最も美しい自由と力の要素として描いてゐる。サンセヴェリ

ーナ・レナール夫人をはじめとして、彼の小説に現れる幾人かの女性はいづれもそれぞれの型において、熱情が智慧となり、力となる美しい自由の所有者たちである。自然の自由は女性によつてのみ美しく存在するといふ眞理は別として、スタンダールはこの自由を、さらに崇高な意志として、男性に與へてゐる。「パルムの僧院」のファブリス・デル・ドンゴがその代表的な一人である。しかし、自然の自由は、本來スタンダール自身の裡に最も生きようとして生きることのできなかつた　即ち、スタンダールに最も近く、そして最も遠い自由である。これに反し、ジュリアン・ソレルの自由は、つねにスタンダールと寢食を共にしてゐる同伴者の理想である。バンジャマン・コンスタンが文学と自己の生活に持つことのできなかつた自由を、スタンダールは悉くそれを文学と自己の生活に持ち合せたことになる。もし、ジュリアン・ソレルの手袋の裏返しがアドルフであるとすれば、コンスタンの裏返しがスタンダールである。しかるに、實は、この手袋の表裏も、同じ性格が同一の對象に接する場合の異つた反應にすぎない。兩者の手袋は、同じ「過度なる感受性」の皮膚を護る防禦の手袋である。

アドルフは、最初に固く彼の心の扉を閉めるようにしむけた父との關係について、次のやうに語つてゐる。

「私は十八歳の年齢に達するまで、父と對談するために、一時間と過したことはなかつた。二人が對面するやいなや、私はそれが何であるか自分にもよく説明できなかつたが、私を苦しく壓へつける一種の束縛を父に感じた。私はその當時、ティミドな性格といふものが何であるかを知らなかつた。それは、年齢の進歩にかゝはらず、いつまでも私達につきまとふ内部の苦しみであり、私達の心に最も深い印象を刻みつけるものである。そのために言葉は冷却し、言はうとすることが口のなかで變質し、曖昧な、時には多少の皮肉をまぜながら、どうにか自分を表現するにすぎない。それはちようど、自分の感情を理解させることができない苦しみのために、その感情に報復手段を望んでゐるやうなものである。」

「私は自分に關することは一切口にしない習慣をつけてしまつた。また、人との会話に仲間入りするときは、あたかも氣のすゝまない必要事であるかのごとくよそほひ、その会話を活氣づけるために冗談しか口にしなかつた。さうすることが疲勞を輕くし、私の本當の考へを隱すのに便利だつたからである。……私は、自分獨りのときだけ自由であつた。……しかし、このような性格が當然持つべきあの深刻なエゴイズムが、私には缺けてゐた。私は自己にのみ關心を持ちながら、私自身といふものは、實は、殆どどうでもよかつたのである。心の深處に、自分にも氣づかないやうな感情の要求を持つてゐたが、この要求は滿たされたためしがなく、次ぎ次ぎに好奇心をひきつけたすべてのものから、私を引離してしまつた。」

これほど適確なティミドの性格分析は稀である。スタンダールの場合、表情は一層複雜であるが、性格の力が凸凹を明かにしてゐる。まづ、「日記」のなかに、ルウソオと殆ど同じ言葉がある。

「私はつねに、識るよりも多く感じた。そのために私は、子供のやうに新鮮になつた。」

「私は、かくまで感ずることのできる魂を授けた天の神に感謝しながら床についた。」

おそらく、スタンダールは、感ずる幸福をルウソオに劣らず、コンスタンよりも遙かに多く味つたにちがひない。少くとも、最初の冷却がくるまでは。

「私は、最初の冷却に出会ふまでは、友情においても、戀愛においても、生氣に滿ち、情熱的で、狂氣じみて、極端に誠實であつた。」しかるに、この冷却に出会ふや、「私は、一瞬にして、十六歳の熱狂から五十歳のマキアヴェリスムに移る。そして、一週間の後には、氷水のやうな、完全な冷さだけが殘つてゐる。」(Souvenirs d'égotisme, p.89)

スタンダールがいよいよスタンダールになるのは、その手袋を活用するのは、この時からである。エドアール・ロッドによれば、(E. Rod, Stendhal.)「スタンダールが非人情家のやうに見られるのを望んだのは本當である。その目

的を達成するために、彼は自ら皮肉と苛酷とエゴイスムの仮面を造つた。彼は「強き人」の鎧をまとひ、めつたに尻尾をつかませることはなかつた。」こゝで、スタンダールとジュリアン・ソレルとの區別はつかなくなつてゐる。青年ジュリアンには皮肉がないだけである。しかし、アドルフもその作者も、また、ジュリアンもその作者も、理解と愛情の滋味を缺いた家庭に育つてゐる。彼らの父親に對する感情は、彼らがいづれも自由の敵者として父親を感じてゐる点で、殆ど同一である。アドルフが「その結果、私は切に獨立を望んだ。私を取圍む繫がりから逃れたいと思つた。」といつてゐるやうに、スタンダールは故郷グルノーブルと父親の許を去つてゐる。彼もまたその少年時代に自然の自由を奪はれた一人であり、最初の冷却と孤獨の經驗者であつた。「一八二一年時代の抒情的な夢想、そして、その後の哲学的なメランコリックな思索が、私にとつては無上の悅びとなつたので、誰か知合ひの友人が私の方へ近寄つて來るときなど、彼が私に話しかけないやうに、彈丸でもぶつけたくなつた。面識のないたつた一人の人間を見るだけでも束縛を感じた。」

メリメはかういふスタンダールが、少數の氣心の合つた友人仲間では、まつたく別人であつたことを傳へてゐるが、「次ぎ次ぎに、好奇心をひきつけたすべてのものから　私を引離してしまつた」といふアドルフのやうに、彼もまたその人生經歷のなかで多くの對象から離れてゐる。しかし、この離れ方は、アドルフよりも、むしろ多くアミエルに似てゐる。生活の方法と熱情（パシオン）の信仰者スタンダールは、最も遠くアミエルから離れながら、對象を手荒く摑むエゴイスムと不敵な信頼感」を持ち得なかつた点では、同じティミッドの性格に屬してゐる。少くとも彼の戀愛經歷において明かにさうであつた。

四

しかし、これらティミドな性格者たちは、それぞれの心理分析や方法の信仰や對象からの逃避によつて、即ち彼らの自然征服の様々な仕方によつて、自由の均衡と安全に近づいたのだらうか。彼らの性格の本質がすでに、その不可能を證してゐるのではないだらうか。何故なら、彼らの自由は、自己の滅却においてさへも自己の精神風土を出ることのできない自己愛著者であり、彼らの心理分析は、分析それ自身ではなく、その分析がつねに彼ら自身に役立ち奉仕する分析だからである。即ち、解釋された心理分析である。同様に、彼らの思想や哲学も、しばしば、詭辯の調子をおびてゐる。のみならず、彼らは自己の魂を試みながら、つねに、彼ら自身に對して、より多く、または、より少く約束する。自己を測定する尺度が多すぎるか、少なすぎるかである。彼らが現實の生活者として在るかぎり、そして彼らの精神が求めることを止めないかぎり、動揺と不安の運命を脱することはできない。彼らの眞の復讐は創作活動においてのみ果される。それは、病人が苦痛の聲を放つことによつて苦痛を輕減するといふ消極的な意味ではなく、そこでは、自己の全責任において、その全責任によつてのみ自由が果されるからである。彼らは、たとへそこに滿されざる自由を發見したとしても、彼らの自己以外に責任者は存在しない。さらに、創作活動から生れる文體や作品の全體が持つ意味と形は、彼ら自身にも豫見し測定することができないものであつて、彼らの精神はこゝではじめて、生を生き、自己の原型を創るのである。一つの繪畫や彫刻が心理の模形ではないやうに、彼らの自己は、分析を越えた一種の精神物象となる。サルトルはプルーストの知的な分析行爲を非難してゐるが、文学は、分析の骨を刻むことによつて肉を創る点で他の造型藝術とは異つてゐる。優れた心理文学は分析の鋭さから最もよく生きてゐる生命を創る文学でなければならない。「實驗小説論」のゾラは、スタンダール文学の分析と思想の抽象性を攻撃して、頭脳文学と呼び、分析を逃れた事實の發見や描寫を稱讃してゐる。また、「もし彼（スタンダール）が自然主義文学の先頭に立つてゐるとすれば、それは、彼がひたすら心理家であつたからではなく、心理家としてのスタンダールが、現實

の眞理に到達するだけの力を持つてゐたからである。」（Les romanciers naturalistes）といつてゐる。しかし、ゾラの言ふ現實とは、法則的な、一般的な自然が最も卑近な事實となつて現れる場合の現實である。スタンダールの自由とは何の關係もない。彼が「パルムの僧院」よりも「赤と黑」を賞揚する理由がそこにある。その理由は、「赤と黑」の輝かしい、いはば肉體的な眞實を示してはゐるが、スタンダール文学を貫く最も重要な精神の現實を無視してゐる。それは、スタンダールが「義務」と名づけてゐるもので、最初は方法的な精神として現れ、やがて、分析が分析を越えてゆくやうに、その方法の尺度が役立たない、即ち、ジュリアンがジュリアンを、スタンダールがスタンダールを乘越える場所まで連れてゆくものである。心理が心理でなくなり、それから先は宗教だ、とアランが言ふ高い限界点に通ずる道である。この報酬のない文学は、スタンダールにとつて無に等しい。彼の文学が十八世紀の分析とロマネスクの混血兒だといふやうな批評は、作品の素材の品定めには役立つが、作品の性格とは無關係である。このことは、ブールジェの「弟子」についても同樣である。弟子グレスルウが師アドリアン・スクストの思想に殉ずることを義務としたのは、十九世紀科学思想の影響であることには違ひないが、それだけの意味では、この小説も文学ではない。ブールジェはこの小説の序文に餘りこの影響について類型的に語りすぎてゐるやうに思はれる。しかるに、弟子グレスルウも明かに、ティミドな性格者の一人である。彼の性格は例のごとく「自我の孤獨感と內部分析の能力」によつて決定されてゐる。家庭における最初の冷却原因が、父親でなく、母親であつたのが、コンスタンやスタンダールと違ふだけである。

「かうして、やつと知的生活に入らうとした時、私が知つたのは、私たちの間には通じ合ふことができない暗い要素が在ることでした。それは先づ、私の場合、ティミドな性質でした。次にこの性質は自尊心に變りました。しかし、すべての自尊心がそこから來るのではないでせうか？　自分を他に見せないことは、他から自分を隔離すること

であり、それは直ちに他より自分を選ぶことです。爾來、私は、新しい哲学者たち、例へばルナンのなかに、魂の孤獨感を見出しましたが、それは勝誇つた超越的な侮蔑の感情に變つてゐるものでした。またこの孤獨感が、バンジャマン・コンスタンの「アドルフ」のなかでは、病的な非人情に、ベール（スタンダール）の場合は、挑戰的な、皮肉な精神に變つてゐるのを發見しました。……この感情は、最初、母親に適用され、その後、学校の友達仲間や教師に及び、ますます成長してゆきました。私は自分が彼らと異つてゐるのを感じました。その相異の氣持を一言に要約すれば、私は彼らを全く理解してゐるのに、彼らは私を理解してゐないといふ考へ方でした。」

この分析にティミドの原則を叙述したやうなものである。スタンダールはジュリアンにナポレオンとルウソオと立身出世の野心を與へたが、ブールジェは弟子グレスルウにテーヌやルナンや實驗心理学の信仰を與へた。ジュリアンはモール孃を、グレスルウはシャルロット孃を分析の實驗對象に用ひた。文学の筋からいへば、たゞこれだけである。問題は、この小説實驗において兩者がいかに成功してゐるかどうか、といふことであるが、こゝでは、前者が、時には衒ひさへ感じさせる文體の無味と簡潔さにもかゝはらず、作品の厚味を持ち、作者の個人が深く滲透してゐるのに對し、後者は、分析の論理の滑かさにもかゝはらず、告白書簡體としての抽象的な弱さを持ち、やゝテーマ小説と訓話の匂ひがする、といふに止めておく。しかし、兩者とも、性格表現の典型的な文学であることは變りはない。

ジュリアンがあらゆる場合に、對象と自己への明察を怠らず、自己感情の封殺を心懸けたやうに、弟子グレスルウにとつて、心理学の實踐は、感情の生體解剖として、自然征服の最上の武器だつたのである。しかしそれは、信仰の武器である故に、己自身に果せられる義務の刃となつてはたらく。義務は、自然の禁止であり、自由の命令である。ジュリアンもグレスルーも、この禁止命令の刃に刺され倒れたのである。

ジュリアンの義務は、「赤と黑」のあの有名な田園の章に現れる場面である。

「その手はす早く引込められた。しかしジュリアンは、自分の手がふれても、その手を引込めさせないやうにするのが、自分の義務だと思つた。義務は果さねばならぬ。もしそれを遂行し得ぬときは、物笑ひになる、といふよりもむしろ人に劣つてゐるといふ感情を甘んじて受けなければならない。さう思ふと、あらゆる樂しみが、たちまち、彼の心から消え去つた。」

しかし、この義務は容易なものではなかつた。

「（はじめて決鬪するときでも　自分はこんなにびくついたり、情けない氣持になつたりするだらうか？）と彼は反問した。他人にも、自己にも、信をおくことのできない彼は、自分の精神狀態を見つめずにはをられなかつた。

この死ぬほどの苦しみは、どんな危い仕事でも、その方がずつとましだと思はれるほどだつた。何か急の用事で、レナール夫人が庭を去つて家へ戻つてしまへばいゝ、彼は幾度そんなふうに思つたことだらう！　ジュリアンの自己苛責はじつに激しかつたので、自らその聲もひどく變らずにはゐなかつた。」

「義務と氣後れとが交へる恐ろしい戰ひの苦しみのために、彼には自分以外のものを何一つ見てゐる餘裕などなかつた。」

「彼の心は歡喜に溢れた。レナール夫人を愛するからではない。恐ろしい責苦がいま終つたからである。」（スタンダール全集）

ブールジェは「弟子」のなかにこれと同じ場面を、スタンダールよりも約六十年後に書いてゐる。

「この考へに、私の心臟は高鳴つた。私をひき止めたのは、面目もなく追拂はれるのを恐れたからではなかつた。私の自尊心にとつて、敢てそれを遂行しないことは一層恥づべきことだつた。にもかゝはらず、私はためらつた。夜半、もつと狂氣じみた決意のために、幾度私は目を醒したらう！　心の動搖で身體はすつかり冷い汗にぬれ、私は寢

床から起きた。」

弟子は、このとき未だジュリアンの決行にまでは行かないが、次の彼の言葉を聞き逃してはならない。

「つひに私は遂行しなかつた。――しかし、それがたゞ私の氣後れ(テイミド)のせいであるなどと、決して信じてはならない。實踐の無力は私の性格的な特徴であるが、それは、行動が思想(イデ)に支へられてゐないときである。一度び思想(イデ)の支持を受けるならば、私の全存在に滲透する不拔のエネルギーが與へられるのである。さういふ時、死に赴くことさへ、私には容易に思はれる。」

こゝにいふイデとは、義務にほかならない。そして、このやうなイデに從つて、他の如何なる動機にも影響されず、死に赴いたのが、ドストイエフスキーの「惡靈」に現れるキリーロフである。彼は自殺することによつて神を否定し、神を否定することによつて最大の自由と獨立を得ることができると考へた。それ故、自殺は彼の至上の義務となり、その義務を遂行したのである。キリーロフとピヨトル・ヴエルホヴェンスキーとの会話がそれを語つてゐる。

「もし神が存在すれば、一切が神に從屬する。僕は神の意志から離れては何もできないことになる。もし神が存在しなければ、一切が僕に從屬する。僕は僕の獨立を確認することができるのだ。」

「君の獨立？　どうしてそれを確認しなければならないんだ？」

「なぜつて、僕はそのとき完全に自由になつてゐるではないか。神を抹殺し、自我の獨立を獲得しながら、しかもなほ、この突然の自我の獨立を自ら示し得ないやうな人間が、この地球上に存在するだらうか？　僕は自分の頭腦を燒き殺すつもりだ。なぜつて、僕は自殺することによつて、最も完全な獨立を確認するからだ。」

イデが行爲に移されたとき、行爲せしめたイデは何處に居るのか。行爲とともに影のごとく從つてゐるのだらうか。そして心理は？　キリーロフの存在は行爲とともに消滅してゐるので、この疑問を受つけてはくれないが、事實

は深い優れた心理小説と呼ばれる文学のなかに、つねにイデの力が強く支配してゐることである。キリーロフのイデは明瞭であるが、彼の性格と心理は、その底に深く隠されてゐる。彼は、流氷のやうに、その頭だけを出してゐるにすぎない。キリーロフほど明瞭ではないが、ドストイエフスキーの人物は殆ど、何らかのイデの力に動かされてゐる。いはば、無償の義務に従ひ行動してゐる。スタヴローギンも、ムイシュキン公爵もさうである。そのイデが明瞭な形を持つてゐないだけである、といふよりも、むしろ、明かな形を持つことのできないやうなイデに憑かれてゐるのである。

これに反し、スタンダールのジュリアンは、明瞭なイデと明瞭な心理の所有者である。従つて、その性格も明かである。「赤と黒」はその最後から始められるとき、眞の小説となる、といふ意味のことをサルトルがいつてゐるのは、死の他にはすべてを失つたジュリアンの自由はそこからのみ始る、といふ意味である。スタンダールはそれをよく知つてゐた。それ故、ジュリアンをしてすべてを失はしめたのである。それ故、「パルムの僧院」のなかで、ファブリスに牢獄の高い塔を與へたのである。この牢獄こそ、禁止と命令が、即ち自由が、最も高く美しくはたらく場所だつたのである。心理分析は、こゝでは、もはや役に立たなくなつてゐる。（未完）